Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-10-08

母子保健における臨床心理学的アプローチの応用 ー子育ち・子育て支援と援助環境の心理アセスメントー

瀬々倉，玉奈

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2014-09-25
(Date of Publication)
2016-09-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第6253号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006253

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式４）

論 文 内 容 の 要 旨

氏　　名　瀬々倉　玉奈
専　　攻　教育・学習専攻
指導教員氏名　伊藤　篤教授

論文題目（外国語の場合は，その和訳を併記すること。）

母子保健における臨床心理学的アプローチの応用
ー子育ち・子育て支援と援助環境の心理アセスメントー

論文要旨

本研究の目的と構成

養育者の子育て不安の深刻化や児童虐待相談件数の増加，発達障害児の増加など，現代日本における親子の厳しい状況は複雑かつ複合的であり，これに応じる形で，職種の異なる援助専門家が協働して「子育ち・子育て支援」に取り組む必要性が提起されている。こうした多職種（註１）間の協働による支援には，これまでとは異なる新しい方向性や支援システム・支援方法，さらにはロールモデル等を明らかにしていくことが重要課題となっている。

最早期の「子育ち・子育て支援」を担う母子保健領域では，2001年から10年間（後に14年間に延長）の活動指針である「健やか親子21」において，「子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減」がその大きな目標の一つとして挙げられている。例えば，乳幼児健康診査などの場で，養育者の子育て不安や子どもへの虐待予防を試みるなどの工夫が行われ，さらに児童福祉法の改正による新事業として，「乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）」や「養育支援訪問事業」などが他領域との連携によって展開されている。

こうした取組に従事している職種は，保健師・助産師・保育士・心理職などであるが，既述したように，これまでとは異なる新しい枠組みを必要としている親子支援において，協働関係が効果的に機能しているかどうか，言い換えれば，互いの役割や専門性をどのように分担し発揮し合えば良いのかを的確に評価し，方向づける研究はほとんどなされてきていない。例えば，子育ち・子育て支援に力を注いでいる日本臨床心理士会が主催する第9回の研修会（2013.6.）では，「子育てにかかわる多職種の協働」をテーマとしており（馬場.2013），子育ち・子育て支援における多職種との協働の重要性についての合意はあるものの，個々の現場の優れた援助実践事例を紹介するに留まっており，如何に他種と協働するのか，広く活用できるような理論構築には至っていない。

本研究は，臨床心理士である筆者が，約20年間にわたり複数の保健所・保健センターにおいて他職種の支援者と協働しながら工夫を積み重ねてきた援助実践・研究を総合的に整理・分析することを通して，多職種間の協働を効果的に機能させていくために，臨床心理士の立場からはこれまでの知見を如何に活用することが可能なのか，つまり，母子保健領域における他職種との協働の際必要となる臨床心理学的アプローチの応用について，現場で実際に活用できる概念・理論を構築することを目的とする。
本論文の構成は以下である。

第１章　母子保健事業の変遷と心理職

1965年制定当初の母子保健法の目的は，乳児死亡率の低減，子どもの障害や疾病のスクリーニングとその対処，いわば「子育ち支援」であった。時代の要請と共にその目的は変遷しており，現在は，養育者の子育て不安や子どもへの虐待への対処，すなわち「子育て支援」が加わってきている。つまり，子育ち・子育て支援が現在の母子保健の目的となったのである。

この母子保健の目的の変遷に伴い，この領域で働く心理職の役割も変遷してきている。従来の母子保健の目的においては，心理学の中でも特に子どもの心理的な発達に関する知見の積み重ねが豊富な，発達心理学的なアプローチが最も有効であった。加えて，母子保健の目的に広い意味での子育て不安や，虐待の世代間伝達による子育てにあたっての不安の活性化，虐待防止などの対応が近年になって必要となったことから，不安を扱うことや面接を通して心理的な援助を行う実践知を積み重ねてきた臨床心理学的なアプローチも必要になってきている。つまり，母子保健領域に関わる心理職は，主に発達心理学と臨床心理学という2つの異なる領域の心理学を身につけながら，さらに臨床心理学的なアプローチについては，個人心理療法の知見を応用するという，複雑な作業が必要とされている。

本章では，母子保健の目的の変遷と，それに伴う心理職の役割の変遷について，厚生労働省が提示した10年間（開始当初）の活動指針である，「健やか親子21」開始時と10年後に実施した質問紙による全国調査結果の比較，および，インタビュー調査結果を通して検討する。

第1節 母子保健の目的の変遷と心理職の役割の変遷

まず，文献・資料などのレビューを通して現代の子育て環境について概観し，その時代，時代の親子が晒されている状況に応じて変遷してきた母子保健事業の目的を整理・確認し，実際に行われている母子保健事業について述べる。さらに，こうした目的の変遷に伴って，母子保健事業に従事する心理職の役割がどのように変化してきたのかを概観する。また，こうした変化には，発達心理学の知見に加えて臨床心理学の知見も必要になってきていることを確認する。

第2節　「健やか親子21」の10年間と心理職の役割の実態：
全国質問紙調査【2001調査】・【2011再調査】10年間の比較

母子保健領域における活動指針として提示された「健やか親子21」開始時の2001年度と，当初終了予定であった2011年度（後に終了予定年度が2014年度まで延長）に，全国の保健センターで母子保健事業に従事している保健師と心理職とを対象に実施した2回の質問紙調査「心理職の役割に関する全国調査」の結果を比較検討する。

第3節 保健師の心理職イメージと心理職の葛藤：インタビュー調査を中心に

比較的積極的に心理職を活用しているある保健センターにおいて，保健師と心理職とを対象に実施したインタビュー調査を，第2節の質問紙調査を補完する研究として実施した。このインタビュー調査の結果を中心に，母子保健領域における心理職の役割について，保健師からみた心理職のイメージ及び心理職への期待を明らかにすることに加えて，心理職の役割モデルの欠如からくる心理職の抱える葛藤や個々の工夫について論じる。

第２章　保健センターにおける子育ち・子育て支援に関わる理論的枠組み ：多職種との協働と臨床心理学的アプローチの応用

本章では，まず，臨床心理学的アプローチの基本である心理療法の概念を整理し，精神分析から展開された対象関係論について述べる。さらに，心理療法において生起し重要な役割を果たす一方，扱いを間違うと危険性をも伴う転移という特殊な現象について論じ，この現象故に，安易にどこででも心理療法的な関わりを行うべきではないことを主張する。

さらに，精神分析，対象関係論をベースにしながらも，超学際的と表現されるほどに発展・展開されてきた乳幼児精神保健学の基礎理論を概観する。
子どもへの虐待の背景として，現代の子育て環境の厳しさが挙げられる一方で，養育者の被虐待体験の世代間連鎖との関係が指摘されている。このことから，虐待を養育者による単なる加害とするのではなく，親子の関係性の不具合，すなわち「関係性障害」と捉え，乳幼児と養育者を一つの単位として早期からアプローチすることを基本としているのが，この乳幼児精神保健分野の特徴である。

その上で，多職種との「協働」，「連携」などの用語の定義の確認を行う。

第1節　子育ち・子育て支援における多職種との協働と臨床心理学的アプローチ

子育て不安や子どもへの虐待など心理的な不安が関係する問題については，臨床心理学的なアプローチが有効であるが，個人心理療法とは異なる構造では，心理療法そのものではなくその応用が必要である。なぜ，応用が必要なのか，その理由を心理療法のもつ特殊性，すなわち転移現象の生起とそれに伴う危険性をもとに論じる。

第2節　乳幼児精神保健学の基礎理論と多（他）職種との連携・協働

まず，子育ち・子育て支援において重要な観点として日本でも認められつつある乳幼児精神保健学の基礎理論について概観する。
さらに，多職種との間で行う「協働」の定義を確認し，「連携」との違いについて整理する。

第3章　他職種との連携・協働のための臨床心理学的アプローチの応用

他職種との協働のもとで実施する臨床心理学的アプローチの応用とその為に必要な2つの心理アセスメントについて考察する。

第1節　従来の心理アセスメント

母子保健事業の課題が変化したことから，その援助対象の心理アセスメントの内容も改善の必要性が生じている。この子どもの発達という側面については，新しく発達障害に関するアセスメントの必要性が指摘されている。このことから，これまでの3歳児健診で終了していた乳幼児健診の後に，5歳児健診を行う自治体が少しずつ増えてきている。

さらに，母子保健事業開始当初の目的に，子育て不安への対応や子どもへの虐待防止等といった子育て支援が加えられたことから，援助対象の心理アセスメントの内容にも，親子関係，養育者の心理状態が加えられつつあることについて述べる。

第2節　援助環境の心理アセスメント

本節では，他職種との協働による臨床心理学的アプローチの応用の際，従来から実施されている「援助対象の心理アセスメント」に加えて特に必要であると筆者が考える「援助環境の心理アセスメント」について論じる。

第４章　Y保健センターに関する援助環境の心理アセスメント

本章では，その自治体で初めての心理職として筆者が関わったA保健センターを「援助環境のアセスメント」の視点から検討する。

第1節　援助環境の心理アセスメント：Ⅰ.組織に関する側面

本節では，援助環境の心理アセスメントのうち，心理職がその組織に参入する際に必要な作業である，Ⅰ.組織に関する側面について，具体的に示す。

第2節　援助環境の心理アセスメント：Ⅱ.スタッフに関する側面およびⅢ.援助構造に関する側面；①②③

Ⅱ.スタッフに関する側面及びⅢ.援助構造に関する側面について，A保健センターを例に具体的に示す。

第5章　Y保健センターにおける心理職と他職種との協働の実際

本章では，筆者が援助対象の心理アセスメントおよび援助環境の心理アセスメントをもとに，多職種との協働によって行ってきた援助事例を検討する。
なお，本章で扱う事例については，保護者や支援を行った保健所・保健センターに，研究上の活用を許可されているが，個人情報保護の観点から，援助実施地域，援助を行った時期などを明示せず，家族構成なども論文の主旨を損なわない範囲で加工を施している。

第1節　相談型アプローチ１：センター来所・個別型

本節では，A保健センターでの通常の援助形態であるセンター来所・個別型について述べる。援助対象の親子が保健センターに来所し，保健師・保育士・心理職が協働して行う個別型の援助について，援助対象（親子）のアセスメントと，援助環境の心理アセスメントの結果をあわせて考えた場合に可能となる援助構造の活用について，幾つかの事例を簡単に紹介しながら論じる。

第2節　相談型アプローチ2：：アウトリーチ型

強い育児不安を訴える妊娠後期の母親とその子どもらに対して実施した家庭訪問による危機介入事例について考察する。
家庭訪問という援助の形態は，保健師の職制には初めから含まれているが，保育士や心理職にとっては，新規のものである。筆者にとって初めて行った家庭訪問という従来とは異なった援助構造は，援助対象の心理アセスメントと共に援助環境の心理アセスメントという2つのアセスメントの重要性を強く意識する経験であった。
また，多くの場合，次子の妊娠によって当たり前のように中断してしまう長子の相談援助についても，再考する必要を痛感した事例でもあった。
面接の中で母親が語った内容は，臨床心理士でなければ対応できない内容を多く含んでおり，必要に応じて家庭訪問による臨床心理的アプローチを行うことの必要性を教えられた。また，母親の不調により緊張し萎縮していた子どもらに，保育士が家にやってきて関わってくれることの大切さや保健師の役割など，多くのことを教えられた事例について考察する。

第3節　相談型アプローチ3：：母子保健事業フル活用型

子どもを受け入れがたい母親とその子どもへの支援事例について報告する。
初回面接から，親子の様子は緊張に満ちたものであった。子どもは経験不足なのか子ども自身の資質によるものなのか見極める必要のある様子が認められた。援助対象の心理アセスメント結果からは，親子共に間断なくきめ細やかな援助が必要であると考えられた。一方，援助環境の心理アセスメント結果からは，母子保健事業をフル活用することで保健センター全体としての支援頻度を増やし，様々な角度から親子を支援する必要が理解できた。

その為，可能な限りのスタッフ間の協働と母子保健事業の活用を行いながら支援を行った。保健師・保育士・臨床心理士を中心とした多職種間の協働と，保健センター内で実施される個別面接，親子教室（グループ遊び），養育者を対象としたワークショップ「らくがきゲーム」等様々な母子保健事業をフル活用し，他機関との連携も経て，少しずつ親子関係が紡ぎ直されていった経過を報告し，母子保健領域ならではの親子支援について考察する。

第4節　予防的アプローチ1：　子育て教室における養育者間スクイグル法の導入

第5節　予防的アプローチ2：子育て教室における養育者間スクイグル法「らくがきゲーム」と託児

保健センターにおける子育ち・子育て支援では，公衆衛生という観点から問題発生や深刻化の予防的な関わりを重視しているのも特徴の一つである。これに対して，個人心理療法の場合は，既に症状形成がなされているなど，問題が形をなしてしまっているものに対応しようとするのが基本であり，この点で保健センターにおける子育ち・子育て支援と個人心理療法の目的は大きく異なっている。
本節では，親子の関係生成の促進と子どもへの虐待予防という観点から，子どもの心理療法で行われるスクイグル・ゲームを筆者が応用した「らくがきゲーム」の実践をもとに考察する。その際，子育て教室における親子分離という，一見矛盾する設定が意味をもつことについても言及する。

第6章　総合的考察：母子保健における心理職の役割と他職種との協働

本章では，これまでの総括と今後の展望について述べる。
第1節　本博士論文の要約と全体的考察
第2節　援助環境の心理アセスメントの意義
第3節　母子保健における臨床心理学的アプローチの応用と心理職の役割
第4節　本研究の限界と展望

謝辞

（5923文字）

（注）3,000～6,000字（1,000～2,000語）でまとめること。
（別紙様式５）

［課程博士用］

論文審査の結果の要旨

氏　　名	瀬々倉　玉奈		
論文題目	母子保健における臨床心理学的　アプローチの応用 －子育ち・子育て支援と援助環境の心理アセスメント－		
判　　定	合　　格・不　合　格		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	主　査	教授	伊藤　篤
	副　査	教授	朴木　佳緒留
	副　査	教授	松岡　廣路
	副　査	教授	森岡　正芳
	副　査	教授	鳥居　深雪

要　　旨

本研究は、臨床心理士である学位申請者が、複数の保健所・保健センターにおいて約20年間にわたって他職種との協働を軸に展開してきた援助実践・研究を総合的に整理・分析することを通して、子育ち・子育て支援に求められる内容の変化に対応するためには、多職種間の連携という文脈において、臨床心理の立場から心理職がどのような役割を果たすこと可能かを明らかにすることを試みたものである。言い換えれば、母子保健領域において多職種が協働する際に、心理職に必要とされる臨床心理学的なアプローチとして、申請者が提起する「援助環境のアセスメント」が心理職の役割として有効であることを明らかにすることを目的とした研究である。論文全体は、第1章～第6章で構成されている。

第1章では、母子保健事業の目的とそれによって提供されるサービスが社会・時代の変化とともに変遷すること、それに伴って関連専門職や心理職に求められる役割もより複雑・多様な方向に変化していることを、文献・資料、2001年度と2011年度に実施した全国規模の質問紙調査、ある保健センターにおいて実施した保健師と心理士を対象としたインタビュー調査によって明らかにしている。

第2章では、母子保健の分野でこれまで心理職によって主に実践されてきた子どもの発達アセスメント（障害の発見）や養育者への心理療法（精神分析が中心的手法）といった「援助対象の心理アセスメント」に関連する臨床心理学的諸理論を検討することを通して、現在では「援助環境の心理アセスメント」が必要になってきていることを導出している。

第3章では、前章で提起された「援助環境の心理アセスメント」を従来の「心理アセスメント」と比較しながら改めて定義づけた後、そうした援助環境の心理アセスメントの具体的内実を「組織」「スタッフ」「援助構造」という3つの側面から整理するとともに、こうしたアプローチが他職種との協働を促進させる可能性に言及している。

第4章では、学位申請者の保健センターでの経験（当時の会議録や学会発表資料、協働スタッフであった保健師・保育士を対象として実施した対話形式のインタビュー調査結果）に基づいて、保健センターにおける具体的な多職種との協働を視野に入れた心理職の役割のあり方と意義・価値を整理している。

第5章では、学位申請者の保健センターにおける豊富な経験に基づき、複数の支援パターン（センター来所者への個別相談型、センターからアウトリーチする家庭訪問型、子育て拠点でのグループ対応型、センターの資源をすべて使うフル活用型）に分けた上で「援助環境の心理アセスメント」が、各場面においてどのように機能しているかを考察している。

第6章では、総合的な考察として、第1章から第5章までの内容を要約・検討するとともに、この研究で提起された役割を十分に果たすことができるよう、母子保健サービスにおける家庭訪問への心理職の積極的なかかわりや、社会福祉サービス（地域子育て支援拠点など）における心理職の積極的なかかわりなど、今後の協働をめぐる展望についても議論している。

以上のように、本研究は、近年になって社会問題化した育児不安や児童虐待を予防するという目的も付加された母子保健事業のサービス展開における心理職（臨床心理士）の役割を、専門職間の協働という文脈にかかわらせながら明らかにしようと試みた貴重な成果であり、多くの関係者が必要だと感じながらもアプローチできなかった課題への挑戦という点で独創性を備えている。また、全国規模の量的調査と統計解析、インタビュー調査による質的検討、ケース記録に基づく事例分析、講座実践におけるパフォーマンス（描画）解釈など、研究目的に応じた適切・多様な手法を採っており、この点で高い実証性も備えていると言える。さらに、母子保健における心理職の役割を具体的に示しているため、当該領域の関係者にとって実践の参考となるという意味で価値ある知見の蓄積でもある。

よって、学位申請者の瀬々倉玉奈氏は，博士（学術）の学位を得る資格があると認める。

なお、学位申請者は，本研究にかかわる下記の審査付き論文を発表しており，博士学位申請の基本的要件を満たしている。

◆Tamana SESEKURA（2004）Support for children and parents at maternal and child health service. エデュケア（大阪教育大学幼児教育学研究室）24, 1-11

◆瀬々倉玉奈（2011）母子保健における心理職の役割に関する事例研究－鳥取県X市保健センターでのインタビュー調査－神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 5(1), 53-56

◆瀬々倉玉奈（2012）乳幼児期の子育て教室におけるスクイグル法応用の試み－親子の前言語・非言語的コミュニケーションの疑似体験－ 国際幼児教育研究（国際幼児教育学会誌）20, 23-38

◆瀬々倉玉奈（2013）子育て教室におけるスクイグルと託児－親子分離の逆説的効果－FOUR WINDS（乳幼児精神保健学会誌）6, 36-47